地誌

#30

よこはまかいこうけんもんし

横浜開港見聞誌

はしもと・ぎょくらんさい

作者：橋本玉蘭斎(1807?-1878?)

成立：文久2年(1862)、慶応元年(1865)

解　題

Keyword

- 五雲亭貞秀
- 「横浜文庫」
- 歌川貞秀
- 横浜浮世絵

開港(1859)まもない横浜を浮世絵師・橋本玉蘭斎(五雲亭貞秀)が訪ねて、自らの絵と文で著した案内記。当時ベストセラーになったといわれる。

(版本)『横浜開港見聞誌』
序(右)、外国人居留地(左)

成立と諸本

原本は版本であるが、奥書がなく詳しい書誌事項は不明である。外題は『横浜見聞誌』で、上・中・下3冊のセット2組、計6冊から成る。各冊の本文には『横浜文庫』の内題が記され、初編から6編までの巻次がある。序文の記載から、前編に当たる3冊が文久2年(1862)に、後編の3冊が慶応元年(1865)に刊行されたと推定される。著者として橋本玉蘭斎誌、五雲亭貞秀画とあるが、同一人物である。原本から約100年後、名著刊行会から1冊本の影印版が刊行され、翻刻も付けられた。なお、書名は「けんぶんし」とも読む。

作　者

本名、橋本兼次郎。文化4年(1807)下総国布佐(現・千葉県我孫子市)の生まれと伝えられるが、出自は不明である。歌川国貞(3代豊国)に入門、絵師となり歌川貞秀を名乗る。号はほかに玉蘭斎、一玉斎、五雲亭など。20歳前から版本の挿絵を手がけ、天保初期から一枚摺錦

絵も制作する。幕末、貞秀は鳥瞰的風景画で独自の表現を確立、絵図制作も多くなる。万延元年(1860)から開港後の横浜を題材とした横浜浮世絵の第一人者として多数の作品を残す。代表作に「御開港横浜之全図」「横浜交易西洋人荷物運送之図」等がある。この時期、彩色小冊子『横浜土産』も人気を博し、次いで自ら文章も綴ったのが『横浜開港見聞誌』である。明治初年まで作品を発表し、明治11年前後に没したと推定される。私生活がほとんど知られていない謎の「空飛ぶ絵師」である。

内　容

各編とも、序文、キャプション付きの絵、文章で構成され、絵の丁数は文の３倍ほどある。文章は比較的平易な漢字仮名交じり文である。

絵は、初編巻頭に横浜港を中心とした貞秀得意の広域鳥瞰図、次に本町周辺の通りと日本人商店、通行や買物の人々が描かれる。２編以後は主に外国人居住地区を対象に、外国船、外国商館とその内部、休日(どんたく)の風景、外国人の暮らし・遊び・服装・容貌など多様な画面を見せる。牛肉の解体・販売やバター製造、コーヒー豆の焙煎、シャボン入浴等、新風俗にも好奇の目が向けられ、また外国の銅版画・石版画を模写して、トラ・ライオン・ゾウなどの動物、漁業や捕鯨、ロンドンの風景など海外の事物も載せている。

文章はほぼ絵を説明するものであるが、神奈川宿から開港場までの行程、開港場の通りや建物など、地名・人名・店名が詳細に記されており、歴史資料としても価値がある。また、貞秀自身の見聞を中心に書かれているため、記述がきわめて具体的であり、開港直後の横浜とそこに生きる内外の人々の姿をいきいきと伝えるものになっている。

史料本文を読む

＜版本＞

●『横浜開港見聞誌』６冊 橋本玉蘭斎誌 五雲亭貞秀画
1862(文久２)、1865(慶応元) [K26.1/22]

＜影印本＞

●『横浜開港見聞誌』橋本玉蘭斎原著 紀田順一郎解説 名著刊行会 1967
[K291.1/46]　※別冊「横浜開港見聞誌 備要」(翻刻)を付す

史料についてさらに知る－参考文献－

◆匠秀夫「横浜錦絵と五雲亭貞秀」(『日本の近代美術と幕末』匠秀夫著 沖積舎 1994 [K70/41])

●『横浜浮世絵と空とぶ絵師五雲亭貞秀』神奈川県立歴史博物館 1997
[K06/57/97-11]